

なつかしやや

中村 龍介

今年七月、私の応援する歌手の多田周子さんが日本クラウンから二枚目のシングルをリリースした。そのCDのタイトルが「なつかしやや」という。

この言葉は単に「懐かしい」という意味だけでなく、誰かを愛おしく思うときや、美しい景色を見たりキレイな音楽を聞いたりして感動した場合にも使う表現である。元々、日本語の「懐かしい」にはそのような意味があったのだが、時代の変化とともに後半の意味は消えてしまった。ところが、唯一、奄美地方の「なつかしやや」という方言にはそれらの意味が今も残っている。

多田さんは何度も奄美を訪問し、ミニコンサートを開いて歌う傍ら地元の人たちとの交流を通じて、「なつかしやや」という言葉の本当の意味を知った。その時から、この方言をキーワードにした曲を作りたいと構想をねっていた。京都芸大の声学科を卒業、ザルツブルグのモーツアルテウム音楽院にまで留学した多田さんには、作曲なら多少のアイデアはあったが、作詞にまでは手が届かなかった。最近知遇を得た作詞家の京えりこ氏に自分の思いを伝え自分のイメージするメロディに合う歌詞を書き上げてもらった。

この家のアンマが心を込めた

(注：アンマ＝お母さん)

おいしい おいしい 島料理

いただきます ありがとう

笑顔の花が 咲きます

なつかしやや なつかしやや

なつかしやや なつかしやや

なつかしやや なつかしやや

帰ってきました ただいま

(おかえり！)

この曲はできるだけ平易な歌詞を用いて、「おもてなし」の心を前面に出すことに重点をおいて作られた。「なつかしやや」のせりふを繰り返すことで、聞く人にもおもてなしをする側とされる側との心の交流が生み出す温もりを感じて貰うことを狙った。更に、歌い手が「ただいま」と歌うのに合わせて、「おかえり！」と観客が応じる、いわゆる観客参加型の構成となっている。

クラシックの世界でも、新年にウィーン・フィルが「ウィーン学友協会・黄金のホール」で行う「ニューイヤール・コンサート」では、演目の最後には、必ず「ラデツキー行進曲」が演奏され、観客は手拍子でそれに合わせる。



こうした観客参加型の演出は、日本の歌謡界ではそれほど一般的ではない。これに対して、「なつかしやや」では、歌い手が奄美地方の楽器である三線を肩にかけて登場し、これを弾きながら歌う。最後の「ただいま」のところに来ると、観客の合わせる「おかえり」の声元気が元気がなければ、「ありがとう！」と大きく叫んで三線を掻き鳴らす。この掛け合いがなんとも言えない迫力となって、歌い手と観客の間の仕切りが外れるような感じを与えるのだ。

「なつかしやや」はリリース直後、CDの売れ行きが素晴らしく、銀座・山野楽器のCD売り場にある「週間売上ランキング掲示板」では、暫くの間「多田周子」の名前がトップにランクされた。恐らくその所為だろう、この「なつかしやや」はリリース直後に、街のカラオケにも登録された。

種は蒔かれた。後は、我々後援会のメンバーが水をやり、花を咲かせて、多田周子をスターダムにのしあげるために努力しなければならない。

この夏は、「なつかしやや」記念のライブや演奏会が目白押しだ。七月には銀座のライブレストラン「ラウンジ・ゼロ」で最初の旗揚げがあり、品川の区民ホールでもチャリティライブがあつて出向いた。今月十八日には、本場奄美大島の「なつかしや家」というレストランで聖地ライブ、二十五日には、千葉の美浜区でもミニライブが計画されている。八月のライブには参加できないが、九月二十七日の赤坂でのライブには顔を出さなければならぬだろう。が、おっと、この日は第四木曜日。「四季の会」がある日だ。だが、会のメンバーの心優しき諸兄姉は、私がライブの方に参加することをきつと許して呉れるはずだ。

【二〇一八年八月 原稿用紙約四・五枚 課題「星（スター）」】